

常夜燈 (3)

西羽 晃

常夜燈は寺社に奉納されているのが多いが、主要な街道にも常夜燈があり、それは街道を示し、夜には明かりが灯され、街燈の役割を果たしていた。東海道筋の七里の渡し場、美濃街道筋の堤原と二つの常夜燈を紹介したが、東海道筋の安永にも大きな常夜燈が残っている。文政元（1818）年の建立で、大神宮（伊勢神宮）への奉納で、五穀成就、国家安全を祈願したものである。寄進者は材木屋連中で、中嶋八郎右衛門、加藤兵八郎、山田彦九郎、平野九郎八、佐々部茂左衛門、小林与左衛門、林宗兵衛、谷小兵衛、平野新左衛門、谷勘六、長谷川小平次、吉川伝七、中嶋孫兵衛、市橋久右衛門、多儀市左衛門、岩田佐右衛門、多儀市右衛門、岐阜・桑原善吉。（石工）根来市蔵藤原恭備。18人の寄進者のうち、桑名は17人である。この常夜燈は桑名市指定文化財になっている。



木曽三川の上流の木材は筏に組んで桑名に送られてきた。それらを取り扱う材木商が桑名に多く、且つ苗字を持っていることから裕福であることを示している。桑名では材木を利用した、家具・仏壇・盆、

椀などの加工業も発達していた。

安永は桑名宿と四日市宿との間にある立場（現在でいうサービスエリア）であって、多くの茶店が立ち並び旅人たちが休憩するところであった。また町屋川の舟運の発着点でもあって多くの人たちが行き来するところでもあった。名物は安永餅であったが、今は店は他へ移っている。

常夜燈の傍らに立っているのが、明治 26（1893）年建立の里程標である。町屋川の中央で桑名郡と三重郡の境となり、津の三重県庁まで 11 里 30 町余（約 43km）であることを示している。

小ぶりな常夜燈が東方にある。大成小学校の少し南の T 字路の角で、明治 34（1901）年の建立である。多度神社への道筋を示す常夜燈である。江戸時代に馬道（今の百五銀行矢田支店の西）から分かれた多度道があった。小野山を通り、照源寺の前を通り、東方の集落を抜けて直角に曲がって播磨の方へ行く道である。その直角の角に目印として、この常夜燈が建てられた。今も大成小学校児童の通学路である。現在は直角に曲がらずに道は直線になっているが、この直線道路は播磨に昭和 14（1939）年に出来た東洋ベアリング（今の N T N）工場を建設するにあたり、桑名駅から資材を運ぶため、東方の集落を避けたバイパス道路である。



東方の常夜燈



昭和 10 年頃の東方